令和 7 年度　静岡大学教育学部附属幼稚園　学校評価書

学校教育目標					
主体的な生活を創造する子　～自発・自律・協同～					
※自己評価の欄：　A達成できた　Bおおむね達成できた　Cあまり達成できなかった　D達成できなかった					
項目	**目標・取組**	**評価指標**	**自己評価**	**診断・分析**	**学校関係者評価**
学校経営	○自分の力で生活したり遊んだりすることを楽しむ	・主体的な学びの姿を追求し、育とうとしている力・育てたい力と、必要な支援を明確にした指導計画を作成する。	**A**	・子どもの実態に合わせた活動や支援の場を職員同士で確認しながら支援の方法を明確に計画・実施することができた。子どもの興味関心と、その時期に経験してほしいことを合わせて取り組めたことで、主体的に自分の力で生活したり遊んだりすることを楽しむようになった。	・子どもの実態に合わせた教育活動を実践していて、園児は主体的に自分の力で生活することを楽しんでいる。
	○自分の思いの伝え方や友達の思っていることを知り、自分や友達のよさに気付く	・一人一人に寄り添いそれぞれの思いを大切にし、協同的な遊びにつながる保育を行う。 ・いじめにつながらないように、友達との思いの違いに気付くようにかかわり、お互いの思いを出し合う場を作る。	**A**	・子ども一人一人に寄り添い、言葉でのやりとりや思いの伝え合いを支えてきたことで、自分の思いを出し合って協力して遊んだり生活したりする姿が見られた。 ・子ども同士で話し合いや相談することを繰り返したことで、お互いの思いの違いに気付き、友達の思っていることを受け止め、自分の思いを伝えようとする態度が育ってきている。	・子ども同士で互いに関わりながら協力して生活している。 ・行事の様子や表現活動から、各学年の子どもたちの確実な育ちを感じる。
	○安心・安全な幼稚園づくり	・園施設や設備・遊具について計画的に安全点検や防災訓練を行い、危機管理意識を高める。 ・木の剪定や草花栽培等、園敷地内の環境整備に努める。（新規）	**A**	・日常的に施設・遊具等の安全点検を行うとともに、具体的な想定から考える命を守る防災訓練を見直し、職員の危機管理意識を高めることができた。また、園児自身が考えられるようにしたり、リスクマネージメントを行ったりしたことで、病院にかかる怪我が2件だけになった。 ・持続可能な林づくり（木の伐採・剪定・再生）や栽培活動等を年間を通じて計画的に取り組めた。	・子ども自らが命を守ることを考えていることは、今後も継続して大切にしていってほしい。 ・附属幼稚園のすばらしい園環境を今後も持続してほしい。そのためには費用も時間もかかるので、保護者にご理解とご協力を得て進めていくことに賛同する。計画的に取り組んでいってほしい。
	○子育て支援の充実を図る ・預かり保育（虹組）の実施(新規) ・幼稚園教育の大切さを発信	・園行事や保育参観会などで子どもの育ちを共有し子育てを支える。 ・未就園児の園庭開放「おひさま」を6回開催し、参加者が増えるように開催日や内容の工夫をする。 ・子育て講座の2回開催（6・9月） ・幼児教育アドバイザーや関係機関を活用した教育相談の充実を図る。 ・懇談会やたより・HPで在園児や未就園児の保護者への子育て支援を行う ・園の教育とのつながりを大事にした預かり保育を充実する。（新規）	**A**	・保護者の保育参観を工夫し、集まりの様子や異学年交流での様子を見てもらい、より多くの状況での子どもの様子を共有することができた。また行事を子ども主体で大切に進め、取組の過程を丁寧に保護者に伝えることで、ねらいを理解してくれる保護者が多かった。 ・「おひさま」「子育て講座」など、保護者同士がつながる場も意図的に設けたことで、保護者同士で子育ての悩みやコツを共有する機会となった。 ・HPや園と保護者間の連絡ツール「パステルApps」アプリを大いに活用して、情報発信に努めている。 ・預かり保育の職員と各学年の担任が、園児の様子を情報交換し、教育時間と預かり時間の連携・つながりを大切にしている。 ・預かり保育の利用者が増え、保護者支援にもつながっている。	・「おひさま」は毎回25名を超えるほどの参加者数で、楽しかったという感想を多く聞いた。また、預かり保育は、保護者からの要望を受け入れその都度改善しながら実施していることで、利用する園児が増え、保護者からも好評である。園の子育て支援によって、次年度の入園者数の大幅な増加につながっていると考えられる。今後も子どもを中心に考え改善しながら保護者を支えていってほしい。
	○働き方の工夫・改善に努める	・同僚性を高め、のりしろのある働き方を推奨していく。 ・研修、会議ではICT機器を活用しペーパーレスで効果的、効率的に行う。	**B**	・担任の数は減ったが、職員同士で積極的に声を掛け合い、虹組職員や級外補助とも連携し、同僚性を高め、各行事や分掌業務を進めることができた。 ・アンケート機能やteams、パステルAppsを活用してペーパーレス化に努め、少しずつ効率化を図れた。 ・行事の企画等は見通しをもって早めに取り組み、途中経過も職員に周知するように心がけた。	・今年度学級減によって職員も減るという、子どもを取り巻く厳しい社会情勢の中でも、園の経営・教育活動をよくやっている。今後も仕事内容を見直し職員の主体性を大切にしてほしい。

教育研究	○「あそびについて語り合おう」 ー「架け橋期」の教育を見据えてー	・実際の子どもの姿を見て、事例検討を行うことによって幼児理解を深め、一人一人にふさわしい指導計画や3つの資質・能力の視点から子どもの姿を捉えた教育課程を作成し、反省考察を循環的に行い保育の質を高める。 ・公開園内研修を進めるにあたり、3回、講師を招き示唆をいただく。	A	・3学年共通した遊びでの事例検討を行ったことで、遊びのつながりが見えてきた。また、年齢別の遊びについての理解が深まった。子どもの遊びでの「学び」を繰り返し見ていくことで、子どもの育ちについても見取ることができ、教育課程に活かすことができた。 ・アプローチカリキュラムと保育実践の見直しをしたことで、資質・能力の捉え方に気付くことができた。また、園内研修の講師の先生に、具体的な保育の話を手掛かりに専門的な解説をしてもらい、保育の質の高まりにつながった。	・園内研修が深まっていることで、子どもたちの学びも充実している。 ・「附属」としての在り方を大切にしながら研修を継続して行い、職員の経験年数の大きな違いがあっても、質の高い保育を実践していってほしい。
	○静岡県、地域における幼児教育の質の向上を目指し、情報の発信に努める	・年3回公開研修の実施 ・教育課程をHPに掲載 ・静岡市こども園課と連携し職員育成を行う。	B	・公開研修では、参加者との語り合いでの意見交換によって園の違いから見えてくる学びがあった。 ・県教委、市こども園課との関わりを深め、研修会に参加し意見交流をしたり本園で研修会を行ったりするなど幼児教育の質の向上を図っている。今後、文科省主催研修会等の研修報告を県や市町の幼児施設にも情報提供することに努める。	・今後も積極的に県教育センターや市幼児教育センター・こども園課と連携し、研修を深めてほしい。文科省の情報を市全体へ発信するなど公立・私立幼稚園とのつながりを今後も大切にしていってほしい。
	○全国の附属幼稚園とテーマ別に研修を深め、交流を持ちながら環境や保育者の関わりを探求する	・文科省委託研究や東海北信越附属幼稚園と協力しながら研修を深め、全国に研修結果を発信していく。	B	・全附連のオンライン研修や各園の公開保育に参加し、多くの情報を得た。また、実践例の発表も行った。 ・文科省主催の教育課程研修に参加し、そこで学んだことや得た情報を園外にも発信していく。 ・園のことを、外部に発信する方法がホームページに限られていてる。今後、全附連からのリーフレットを活用する等、発信の工夫をしていく。	・附属幼稚園では、研修＝研究であると考える。「語り合い」を大事にした研修の成果や、広い園庭や林を大いに活用した保育実践など、本園ならではの良さを発信していってほしい。
	○大学教員との連携を取り、専門的知識を職員の資質向上や保護者支援に活かしていく	・大学教員に子育て講座の講師や共同研究（安心安全な幼稚園のリスクマネージメント）の助言をいただく。 （研修会での講師や実践と理論をつなげる助言等）	A	・公開園内研修で静岡大学の先生に講師を依頼したことで本園の保育を何度も見たり情報交換したりしていただき、職員の意識も高まった。 ・今年度も学部長や元附属学校園統括長の公開講座をはじめ、静大の先生方に直接本園に来ていただき、園経営や保護者支援に活かすことができた。子育て講座を3回開催し、3回ともとても好評であるという保護者の声が多く聞かれた。	・静岡大学教員と連携して、子育て支援や研究に役立てていることがとても良い。 ・次年度も引き続き静大教員と連携し、専門性を本園の運営に活かしていってほしい。
教育実習	○教育学部との連携の下で、教育実習に取り組み、教職の楽しさややりがいを感じられるような教員養成・研修に貢献する	・実習を通して意欲を高められるような、講話や職員との振り返りを行い、より具体的な実践や幼児理解力を育成し、教育の楽しさにつながるようにしていく。	A	・学生が意欲的に参加していたこともあり、担当学年担任として学生一人一人に丁寧に指導することができた ・学生が積極的に教材研究に取り組み、子供一人一人に丁寧に接して個の理解に努める姿が見られ、充実して実習を終えた感想をもった学生が多かった。 ・さらに教職に関心を強くする学生が多くいた。	・実習を通して、教職に興味関心を強くもったり、教師になることを希望したりする学生が多くいたことは、今年度の成果と言える。附属の使命を果たせるように学生が意欲的にできる実習であってほしい。

学校評価総括

・全体的に今年度もA評価をしている。今年度1クラス減、次年度更に1クラス減となり、年々子どもの人数が減っているが、次年度3歳児の新入園児数が大幅に増えることとなった。預かり保育の実施などの子育て支援や「おひさま」の取組による効果が大きかったと判断できる。また、保護者アンケートは高評価で、健全な幼稚園経営がなされていることが職員とも共有できている。今後も、本園の良さ・独自性を大いに発信して、地域における幼児教育の中心的な役割を果たしていく。

次年度に向けて

・教育研究の「静岡県、地域における…情報の発信に努める」の項目はB評価としているが、課題に対して、次年度に改善していく方向にある。県や市の幼児教育機関及び公立・私立幼稚園とのつながりをさらに強くして、質の高い教育活動を実践していきたい。また、今後も静岡大学と連携しつつ、預かり保育の在り方の改善に努め、子育て支援をさらに充実していきたい。